

20 世紀初頭ハワイにおける禁酒運動から見る日本人移民コミュニティの多様性  
村松美優、八十田舞、櫻井海鈴、増田風紗、吉沢敬太、上杉奈都子、今市百音、西本昂平

目次

はじめに

一章 ハワイにおける日本人コミュニティの形成

二章 合衆国による影響

三章 組織化した禁酒運動

四章 日本人コミュニティ内の社会構造

おわりに

参考文献リスト

はじめに

19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、アメリカ合衆国の帝国主義政策のもとに同国の準州となったハワイにおいて禁酒運動が隆興した。この禁酒運動は、当時のハワイの人口の約 4 割を占めるようになっていた日本人コミュニティにも大きな影響を与えていった。

ハワイにおける禁酒運動が拡大した背景には、アメリカのである女性キリスト教禁酒同盟 (WCTU) の活動や、アメリカの禁酒運動における政治活動の中心的存在であった禁酒党员による禁酒法制定に向けた運動があった。こうした中、日本人コミュニティにおいては、次々と設立された禁酒会によって禁酒思想が浸透していく。安藤太郎によって設立された禁酒会は 2,000 人を上回る会員を擁していた。当時のハワイの邦字新聞『やまと新聞』は、こうした禁酒会の活動を伝えている。しかしハワイの日本人コミュニティにおける禁酒運動における日本人移民の研究としては、日本政府側の視点から分析した、武藤三代平の研究があるだけである<sup>1</sup>。移民の存在が一枚岩として捉えられ、移民の出身県による違いを除くと、その構成員の多様性に焦点を当てたものは少ない。確かに日本人移民は、その多くが当時急増したプランテーション農園の労働者であったとされるが、ハワイの邦字新聞『日布時

---

<sup>1</sup> 武藤三代平「榎本武揚による日本人移民排斥問題への対策と社会事業の展開：禁酒運動・労働運動・移民奨励の人脈を中心に」『北大史学』55 巻、2015 年。ハワイにおける禁酒運動の対象者に関する先行研究としては、19 世紀のキリスト教宣教師によるハワイ先住民を対象としたマリリン・ブラウンの研究がある。(Marilyn Brown, "Aina under the influence: The criminalization of alcohol in 19th-century Hawai'i," *Theoretical Criminology*, Vol.7, 2003.)

事』には、移民として渡った日本人が創立した会社に関する記事もみられた<sup>2</sup>。

本研究では、ハワイの日本人コミュニティにおける禁酒運動を、日本人移民の歴史とアメリカから受けた禁酒運動の影響を踏まえた上で、邦字新聞を中心とする一次史料を用いて、禁酒会員・酒屋経営者・売春婦という三つのアクターの禁酒運動に対する立場の違いから日本人コミュニティの複層性や多様性を浮き彫りにしていく。

## 一章 ハワイにおける日本人コミュニティの形成

日本からのハワイ移民の歴史は19世紀中頃に遡る。当時のハワイはサトウキビ産業の台頭により労働者を必要としていた。1851年からハワイは中国人労働者を受け入れ始めていたが、欧米で唱えられていた黄禍論が波及したことで中国人の入国が制限され、労働者不足を招いていた。ハワイ政府は日本の幕府と、日本ハワイ臨時親善協定を締結する。こうして350人の、「元年者」と呼ばれる日本からのハワイ移民が誕生したが、ハワイでの労働環境の過酷さゆえに、日本人移民の労働者たちは逃亡を図った<sup>3</sup>。明治政府樹立後、協定は無効とされ、日布関係は悪化した。しかし、ハワイが日布関係改善に努めた結果、1891年には日布修好通商条約が締結される。1881年、成長を続けるサトウキビ産業によって慢性的な労働力不足を抱えていたハワイは、日本に対して労働者としての移民を要請し、明治政府の合意によって「官約移民」と呼ばれる第二次ハワイ移民が誕生した。ハワイにとって日本人移民は、低賃金で働くことに加え、太平洋の民族であるということでハワイ社会に同化可能であると考えられていたのである。第一回「官約移民」の1人である木村齊次は、移民監督官として日本酒「菊正宗」を輸入した人物でもある<sup>4</sup>。彼は九州の島原に生まれ、13歳で長崎のフランス領事からフランス語を学んだ。このフランス語の知識を活かし、徳川幕府の通訳官としてパリに5年滞在したという経歴を持つ、移民の中でもインテリ派の人物である。官約移民としてハワイに渡ると、その才能を買われ移民監督官に抜擢される。そして在職8年目に、木村は木村商会を創立し、日本から「菊正宗」の輸入を始めた。日本酒は当時の炎天下で働くハワイ移民たちにとって、単なる致酔飲料ではなく激しい労働に疲れた心身を癒すためのものであった。ハワイサトウキビ産業の労働者として招致されたこれらの日本人移民たちは、その後ハワイにおける日本人コミュニティを作っていくことになる。

## 二章 合衆国による影響

前述のように日本人移民にとって、日本酒をはじめとしたアルコール飲料は生活に欠か

---

<sup>2</sup> 『日布時事』1917年1月1日、12頁。

<sup>3</sup> 飯島真里子「ハワイ日本人移民の二段階移動:国際移動から国内移動へ」『The Journal of American and Canadian Studies』28巻、2010年、34頁。

<sup>4</sup> 二瓶孝夫「続・ハワイにおける日本酒の歴史」『日本醸造協会雑誌』80巻、11号、1985年、786頁。

せないものとなっていたにも関わらず、禁酒運動が日本人コミュニティ内の人々に広がっていった。その背景にはアメリカ人の禁酒活動家による影響があった。

ハワイの禁酒運動に影響を与えた WCTU（婦人キリスト教禁酒同盟）は、1874年にアメリカ合衆国で設立された組織で、アメリカの北部の都市を中心に禁酒運動を展開した。会員である女性達の目的は酒屋の店主に夫や息子へ酒を売のをやめさせ、彼らが酒に使っていたお金を、家族扶養のために使わせることであった<sup>5</sup>。その活動はアメリカに留まらず、次第に海外にも広まっていく。1883年、WCTUは世界中の政治化に禁酒を訴える請願書を作成し、メアリー・レヴィットを始めとする会員たちがそれを世界中に広める活動を展開していった。その中でハワイを訪れたレヴィットは、ホノルルにWCTUの支部を設立した<sup>6</sup>。また、1901年1月にはWCTUのジェシー・アッカーマン、アダ・マッカートがハワイを訪問し、禁酒演説を行っている<sup>7</sup>。このようにして、WCTUに所属する女性達はハワイにおける禁酒運動の存在感を強めていった。

WCTUに加え、禁酒運動を政治的に推進したのが禁酒党である。同党は、アメリカ合衆国の共和党員で禁酒思想をもった人々によって設立され、アルコール飲料の販売・消費を法的に禁止することを目的としていた。この禁酒党の中心人物であったのがジョン・G・ウーリーである。彼は、自身がアルコール依存症に陥った経験から禁酒運動に目覚め、ハワイを含む多くの国や地域で遊説を行い、禁酒思想を説いた。ハワイにおいてウーリーは、反サルーン同盟の管理人を務め、禁酒運動に尽力すると共に禁酒法制定の必要性を訴え、住民投票へと発展させた。しかし、彼の禁酒運動には批判もあった。彼が行った禁酒運動はウーリズム (Woolleyism) と称され、地元紙の風刺画でも揶揄されていた。例えば、図1の風刺画<sup>8</sup>では、ハワイ人の肩に乗ったウーリーが、潜り酒場を表す「Blind Pig」と書かれた豚の手綱を持って、「禁酒を警戒せよ」と書かれた壁に向かって豚を蹴り上げている。また、図2ではウーリーが禁酒



図 1



図 2

<sup>5</sup> World Woman's Christian Temperance Union <http://wwctu.org/pages/history.html> (最終閲覧日：2020年11月15日)

<sup>6</sup> *Evening Star*, February 11, 1895.

<sup>7</sup> 大原関一浩「併合後のハワイにおける性管理—性管理体制の成立と準州・連邦政府による日本人売買春の摘発—」『国際文化論集』34巻、2号、242頁。

<sup>8</sup> *Evening Bulletin*. July 21, 1910, p.1.

法に関して「それはハワイ人次第」と答えたことから、ハワイ人に乗るウーリーの姿が描写されている<sup>9</sup>。つまりハワイ人の意見を尊重するかに見せながらも、潜り酒場を強引に禁酒法へ向かわせるウーリーを批判していたのである。結果的に、ウーリーが推進した禁酒法はハワイでは7283票対2185票の大差で否決された<sup>10</sup>。

### 三章 組織化した禁酒運動

ハワイでは禁酒法が否決されたにも関わらず、日本人コミュニティで禁酒運動が広がっていった。その背景の一つには、日本人移民によって組織された複数の禁酒会の影響があったと考えられる。1890年に安藤太郎<sup>11</sup>によって組織された「在布哇日本人禁酒会」<sup>12</sup>はその一つである。当時の日本人移民の中には様々な事情から飲酒や博奕に入り浸っていた人がいたため、コミュニティ全体の風紀が著しく悪化しているとの懸念が、コミュニティ内外から出ていた。同会はこの状況を打開すべく、組織されたものである。会員が進んで同会に所属したかは不明であるが、労働者を中心に会員数は約2000人に登り、当時の日本人移民の3割程度が所属する組織になった。こうした日本人コミュニティの風紀改善によって、雇用主である欧米人からの日本人労働者に対する評価は高まり、日本人労働者の雇用が拡大したことが組織の会員増加の一要因であった<sup>13</sup>。同会の他にも、日本人禁酒会<sup>14</sup>や布哇禁酒会<sup>15</sup>などが存在していた<sup>16</sup>。これらの禁酒会はキリスト教の教会を拠点として月次会を行う他、

---

<sup>9</sup> *Evening Bulletin*. June 09, 1910, 1.

<sup>10</sup> *Evening Bulletin*. July 27, 1910, 1.

<sup>11</sup> 明治政府の外交官であった安藤太郎は1886年に総領事としてハワイに渡った。そこで触れた禁酒運動を日本へ持ち帰り、1898年10月1日に日本禁酒同盟会を創立するとともに日本の禁酒運動を先導した。同会は日本禁酒同盟として現在にも続いている。安藤太郎『安藤太郎文集』日本国民禁酒同盟、1929年、40, 211, 214頁。

<sup>12</sup> キリスト教的価値観を基盤とした慈善的事業が発端となって、1890年4月7日に発足した。コミュニティの風紀改善に貢献した他、会員となり禁酒に至った労働者の貯蓄増加にも繋がった。安藤太郎、同上書、220, 221頁。

<sup>13</sup> 同上書、214, 220, 221頁。

<sup>14</sup> キリスト教主義をもとにした矯風運動として、1899年6月にカウアイ島で発足した。毎年5月の第一土曜日に年会、毎月第一土曜日に月次会を開くなどの活動を行っていた。『やまと新聞』1899年6月6日、6頁。

<sup>15</sup> 日本人教会及びメソジスト教会の有志者によって組織され、1901年頃には200名以上の会員が所属していた。ヌアヌ町の日本人教会堂や、リヴァー町のメソジスト教会などを拠点として月次会や親睦会などの集會が行われていた。『やまと新聞』1904年11月14日、2頁、『やまと新聞』1906年1月19日、3頁、『やまと新聞』1935年2月16日、21頁。

<sup>16</sup> 『やまと新聞』1899年6月6日、6頁、『やまと新聞』1903年6月9日、3頁。

音楽会を催すなどして定期的に活動していた<sup>17</sup>。三つの禁酒会はキリスト教との密接な関係があり、世俗的な政治・啓蒙運動とは異なる宗教を土台とする社会改革運動としての側面がある一方で、三つの禁酒会が団結して活動していた様子は見受けられず、それぞれが独自に活動していたようである。さらに、禁酒会による禁酒推進運動を否定的に捉える日本人移民も存在していた。例えば、布哇禁酒会の会長が小学校教員に向けて禁酒禁煙を勧めた際に、教員であるという理由で禁酒しなくてはならないのかという疑問の声も上がった<sup>18</sup>。確かに禁酒会は禁酒運動を広めた一つの要因ではあったものの、主に労働者やキリスト教徒を対象とした活動に止まっており、日本人移民コミュニティ全体に禁酒思想が浸透したわけではなかった。

#### 四章 日本人コミュニティ内の社会構造

日本人移民コミュニティに禁酒運動が与えた影響の一つに、売春反対への取り組みがあった。1901年1月にハワイで禁酒演説を行ったWCTUのアダ・マーカットは、売春婦を「救いがたい隷属」(abject slavery)と形容し、文明化されたコミュニティにおいて、酒同様禁止すべきものと主張した<sup>19</sup>。また、その翌月に設立されたハワイの禁酒同盟(Anti-Saloon League)では、売春反対運動を率いてきたリチャーズ牧師が初代会長になるなど、禁酒運動と売春反対運動は密接にかかわっていた<sup>20</sup>。ハワイでの売春は「売春による悪徳と病気を軽減する条例」<sup>21</sup>により、地元政府、警察や衛生局の管理下に置かれていた。1899年には、ハワイに269名いたとされる売春婦のうち、日本人売春婦は226名に上り、全体の84%を占めていた<sup>22</sup>。

1898年にハワイがアメリカ合衆国に併合されると、売春婦という存在は、市民生活に悪影響を及ぼすものとする認識がより一層強められ、コミュニティ内でも問題視されるようになっていった。それをよく表す事件として、1900年5月に30名を超える売春周旋者の日本人男性達が摘発されたことがあげられる。売春宿が密集した地域の火災を発端に、行き場

---

<sup>17</sup> 『日布時事』1909年4月9日、5頁、『やまと新聞』1905年2月16日、2頁。

<sup>18</sup> 『日布時事』1909年3月25日、4頁。

<sup>19</sup> “Honolulu’s Sins Vividly Portrayed,” *Honolulu Republican*, January 30, 1901, 1; “Miss Murcutt Before Board of Missions,” *Honolulu Republican*, February 6, 1901, 1.

<sup>20</sup> “Anti-Saloon Crusade,” *Honolulu Republican*, February 11, 1901, 1;

“Dr.Chapman‘Spotted’by the Saloon Men,” *Honolulu Republican*, March 2, 1901, 8; “Anti-Saloon League

Ready for Business,” *Honolulu Republican*, March 5, 1901.

<sup>21</sup> Act to Mitigate the Evils and Diseases Arising from Prostitution. 1860年に制定された。

<sup>22</sup> 大原関一浩、前掲論文、227,231頁。

を失った売春周旋者達が市内に出没するようになったことを不安視した地元改革派の人々の要請により刑事告訴に発展したのである<sup>23</sup>。これに伴い、日本人コミュニティ内の日本人の中には日本人移民が大多数を占める売春婦やその周旋者の取り締まりをハワイ政府に対して求める請願書を提出した人々もいた<sup>24</sup>。この事実から、日本人コミュニティ内の対立構造が浮かび上がってくるとともに、内部の雑多性や複層性がコミュニティ形成初期にも見られることが読み取れる。

さらに禁酒自体における対立構造に眼を向ければ、ハワイで設立された酒造会社の存在があげられる。ハワイ初の日本酒醸造会社であるホノルル日本酒醸造会社は、1918年に戦時禁酒令が施行される前まで業績は順調であった。1916年には配当利回りが5割に達するなど、販売している日本酒の売れ行きは非常に良かった<sup>25</sup>。このように業績が好調であったホノルル日本酒醸造会社は、禁酒反対運動に参加していた。1914年の帳簿には非禁酒運動費の記載が計上されており<sup>26</sup>、会社として禁酒反対運動を推進していたことが分かる。1918年の禁酒令施行後、日本酒の製造が禁止されホノルル日本酒醸造会社は製氷会社への転向を余儀なくされた。しかし、日本酒醸造を諦めたわけではなかった。禁酒法施行当初から同法が撤廃されれば直ぐに日本酒醸造に取りかかれる準備を行っていた<sup>27</sup>。個人としても、社長である住田多次郎は禁酒に反対していた。

1918年1月、白人商業会議所といったなどいくつかのハワイ経済界の有力な団体が禁酒運動を本格的に開始した。特にピンカム知事がウィルソン大統領にオアフ島における禁酒運動を請願したことは注目を集めた。これを受け、住田をはじめとする主要な商業家で結成された日本人商業会議所は、オアフ島に禁酒令が出された場合に日本酒の醸造及び飲用を除外することを大統領に請願するために決議文を提出した。日本酒飲用はハワイ在住日本人の慣習であり、害を及ぼす程度まで飲用しないことから、日本人の意見及び嗜好を思慮しないとして、日本酒除外を求めたのである<sup>28</sup>。これによって、3月2日に禁酒令が発布された後も、日本酒醸造の継続は許可された<sup>29</sup>。

おわりに

---

<sup>23</sup> “The Japanese Procurers,” *The Pacific Commercial Advertiser*, April 5, 1900, p.5.

<sup>24</sup> “The Japanese Club That Terrorize the Colony,” *The Pacific Commercial Advertiser*, May 11, 1900, p.3.

<sup>25</sup> 『日布時事』1917年1月1日、12頁。

<sup>26</sup> 吉沢淑、木村精二、林修三『ハワイにおける日本酒・味噌・醤油の歴史 日本酒(その1)』1978年、350頁。

<sup>27</sup> 『日布時事』1932年、12月14日、3頁。

<sup>28</sup> 『日布時事』1918年、1月16日、8頁。

<sup>29</sup> 『馬哇新聞』1918年、3月12日、4頁。

これまで、ハワイの日本人移民は出身県の市街を除くと比較的均質性の高い集団として捉えられてきた。確かに、官約移民としてハワイへ移住し、プランテーション農園の労働者となった日本人移民などはそうした傾向があったかもしれない。しかし、本論で見てきたように、禁酒運動をめぐって複数の立場が存在しており、そこから日本人コミュニティの多様性が見えてきた。禁酒運動の推進を目的として設立された複数の禁酒会には労働者を中心に一定数の会員が存在し、彼らがハワイの日本人コミュニティの禁酒運動を支えていた。一方で、禁酒運動と密接に関わっていた売春反対運動においては、売春の周旋者と地元改革派との対立構造が浮き彫りになったことに見られるように、禁酒運動に対して異なるスタンスを持つ複数のアクターが同時に存在していたことがわかる。さらに、酒屋経営者は禁酒反対費を予算に組んでいたことや、日本酒醸造の継続を求め活動していたことから、禁酒運動に抵抗していたことがわかる。禁酒運動という人々の日々の日常生活から経済活動に至る様々な側面で影響を及ぼす運動に着目することで、背景が異なる多様な人々からハワイの日本人移民コミュニティが構成されていたことが改めて浮かび上がってきた。

(5563 文字)

#### 参考文献

##### 英語一次史料

An Encyclopedia of Facts and Figures Dealing with the Liquor Traffic and the Temperance Reform.

“Anti-Saloon Crusade,” *Hawaiian Star*, February 11, 1901, 1.

“Anti-Saloon League Ready for Business,” *Honolulu Republican*, March 5, 1901, 1.

Cherrington, E. H. ed. *The Anti-Saloon League Year Book*, Columbus, OH: The Anti-saloon league of America, 1908.

*Chicago Tribune*, 14 Aug 1922, 7.

“Dr.Chapman‘Spotted’by the Saloon Men,” *Honolulu Republican*, March 2, 1901, 8.

*Evening Star*, June 20, 181.

*Evening Star*, February 11, 1895.

*Evening Bulletin*, July 27, 1910.

“Honolulu’s Sins Vividly Portrayed,” *Honolulu Republican*, January 30, 1901, 1.

“Miss Murcutt Before Board of Missions,” *Honolulu Republican*, February 6, 1901, 1.

“The Japanese Club That Terrorize the Colony,” *The Pacific Commercial Advertiser*, May 11, 1900, 3.

“The Japanese Procurers,” *The Pacific Commercial Advertiser*, April 05, 1900.

##### 英語二次史料

Ohio history Central, Ohio Anti-Saloon League [https://ohiohistorycentral.org/w/Ohio\\_Anti-](https://ohiohistorycentral.org/w/Ohio_Anti-)

Saloon\_League (最終閲覧日：2020年11月22日)  
PBS HAWAII, Retribution <https://video.pbshawaii.org/video/prohibition-roots-of-prohibition-retribution/> (最終閲覧日：2020年11月22日)  
PBS HAWAII, Wayne Wheeler <https://video.pbshawaii.org/video/prohibition-waynewheeler/> (最終閲覧日：2020年11月22日)  
PBS History of The Anti-Saloon League <https://www.pbs.org/video/history-anti-saloonleague-3u53tw/> (最終閲覧日：2020年11月22日)  
PROHIBITION <https://www.pbs.org/kenburns/prohibition/> (最終閲覧日：2020年11月22日)  
World Woman's Christian Temperance Union  
<http://wwctu.org/pages/history.html> (最終閲覧日：2020年11月15日)

#### 日本語一次史料

安藤太郎『在布哇日本人禁酒会概況』東京禁酒会、明治22年。(国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/836888>)  
安藤太郎「安藤太郎文集」日本國民禁酒同盟、1929年。(国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1881391?contentNo=5> )  
安藤太郎 編『在布哇受洗の始末』メソヂスト出版舎、明治28年。(国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/824471> )  
松浦百英『アメリカを觀て何を教へられたか：附・布哇のことども』一光社、昭和2年。  
国立国会図書館デジタルコレクション  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1090937/21>)  
美山貫一、安藤太郎編『禁酒の福音』教文館、明治34年。(国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/836830>)。

Hoover Institution Library & Archives 邦字新聞デジタルコレクション

- ・『央州日報』  
1919年3月28日；1924年10月29日。
- ・『京城日日新聞』  
1920年9月16日；1920年9月26日；1920年10月27日。
- ・『在米日本人史』  
1940年12月20日。
- ・『實業之布哇』  
1917年4月1日；1917年6月1日；1917年8月1日。
- ・『新支那』  
1915年1月23日；1918年1月28日；1922年10月28日；1922年11月16日；1923年4月20日。
- ・『日布時事』  
1908年9月24日；1908年10月21日；1909年2月13日；1909年3月25日；1909年4月9日；1910年2月15日；1910年5月13日；1911年2月28日；1911年3月2



日 ; 1911 年 4 月 21 日 ; 1912 年 1 月 24 日 ; 1912 年 2 月 7 日 ; 1912 年 6 月 21 日 ; 1912 年 8 月 4 日 ; 1912 年 12 月 18 日 ; 1913 年 4 月 29 日 ; 1913 年 5 月 22 日 ; 1913 年 8 月 9 日 ; 1914 年 12 月 6 日 ; 1915 年 2 月 9 日 ; 1916 年 1 月 21 日 ; 1916 年 1 月 26 日 ; 1917 年 1 月 1 日 ; 1918 年 1 月 16 日 ; 1920 年 5 月 22 日 ; 1920 年 9 月 24 日 ; 1921 年 1 月 6 日 ; 1924 年 6 月 22 日 ; 1925 年 8 月 29 日 ; 1925 年 11 月 11 日 ; 1926 年 5 月 22 日 ; 1928 年 2 月 4 日 ; 1929 年 6 月 28 日 ; 1929 年 11 月 4 日 ; 1932 年 12 月 14 日。

・『日米新聞』

1904 年 1 月 30 日 ; 1913 年 10 月 30 日 ; 1913 年 11 月 1 日 ; 1922 年 11 月 19 日 ; 1924 年 10 月 29 日。

・『紐育新報』

1924 年 10 月 29 日 ; 1928 年 8 月 1 日。

・『布哇植民新聞』

1910 年 12 月 9 日 ; 1911 年 10 月 23 日 ; 1912 年 4 月 29 日 ; 1912 年 5 月 31 日 ; 1912 年 6 月 3 日 ; 1913 年 9 月 17 日。

・『馬哇新聞』

1915 年 5 月 11 日 ; 1918 年 3 月 12 日 ; 1926 年 10 月 1 日 ; 1928 年 1 月 1 日 ; 1929 年 7 月 29 日 ; 1939 年 5 月 19 日 ; 1940 年 7 月 16 日。

・『大和新聞』

1899 年 6 月 6 日 ; 1903 年 6 月 9 日 ; 1904 年 3 月 31 日 ; 1904 年 4 月 22 日。1904 年 11 月 14 日 ; 1905 年 2 月 16 日 ; 1906 年 1 月 19 日 ; 1909 年 4 月 9 日 ; 1935 年 2 月 16 日

## 日本語文献

飯島真里子「ハワイ日本人移民の二段階移動:国際移動から国内移動へ」『The Journal of American and Canadian Studies』28 卷、2010 年。

飯田陽子「19 世紀アメリカにおける女性の社会参加と宗教—禁酒運動とフランシス・ウィラードを事例に一」『東京大学宗教学年報』34 卷、2017 年。

泉啓「ポスト禁酒法時代のアルコール広告に見る「節度ある飲酒」の表象—全米醸造業協会、シーグラム社を中心とした考察—」『財団法人たばこ総合研究センター助成研究報告』、2018 年。

井上昭洋「ハワイ人主権運動の歴史的考察」『天理大学地域文化研究センター紀要』11 卷、2014 年。

上野直蔵、小松幸雄、田口芳弘、ケーリ・オーティス、松井七郎、原猛夫、木村俊夫、松山信直、大下尚一、岩山太次郎、榊原胖夫「座談会 1920 年代のアメリカ」『同志社アメリカ研究』1 号、1963 年。

大原関一浩「併合後のハワイにおける性管理—性管理体制の成立と準州・連邦政府による日本人売買春の摘発—」『国際文化論集』34 卷、2 号、2020 年。

大原関一浩「ホノルル芸妓組合についての一考察 : 1910 年代の日本語新聞記事の分析を中心に」『摂大人文学』26 号、2019 年。

- 岡本勝「全国禁酒法党の台頭と衰退：大統領選挙を中心として」『同志社アメリカ研究』35号、1999年。
- 岡本勝「婦人キリスト教禁酒同盟：その多様化と政治運動化について」『同志社アメリカ研究』22号、1986年。
- 小川 真和子「元年者」とハワイ：ハワイにおける日本人移民の始まりとその後」『立命館言語文化研究』1巻、2019年7月。
- 金沢宏明「米布互惠条約の締結とハワイ併合」『文学研究論集』30巻、2008年。
- 北川扶生子「太平洋戦争期のハワイにおける日本人移民女性の文学— 歌人・安井松乃と『馬哇新聞』—」『立命館言語文化研究』31巻、1号、2019年。
- 栗原涼子「女性キリスト教禁酒同盟 (Woman's Christian Temperance Union) の成立と発展」『言語と文化』2巻、2000年。 国立歴史民俗博物館  
<https://www.rekihaku.ac.jp/outline/press/p191029/index.html> (最終閲覧日：2020年11月22日)
- 後藤新「近代日本における禁酒運動—1890年東京禁酒会の設立まで—」『法政論叢』55巻、1号、2019年。
- 篠田 左多江「ホレホレ節にみるハワイ日本人移民の生活」 『東京家政大学博物館紀要』8巻 2003年。
- 島田法子「俳句と俳句結社にみるハワイ日本人移民の社会文化」『日本女子大学紀要 文学部』57巻、2007年。
- 高橋典史「排日期ハワイ日系社会におけるアメリカ化と宗教—日系人宗教指導者の言説に注目して—」『一橋論叢』2巻、2006年。  
「20世紀初頭のハワイ日系仏教における〈二重のナショナリズム〉の出現」『ソシオロゴス』32巻、2008年。
- 高村宏子「アメリカの禁酒法をめぐる米加関係」『東洋女子短期大学紀要』23号、1991年。
- 田中 和男「酒と健康 —どうして酒はやめるべきか—」『キリスト教社会問題研究』37号 1989年。
- 寺田由美「20世紀転換期アメリカにおけるリンチとシティズンシップ—ウェルズ／ウィラード論争から見るアメリカの自由—」『北九州市立大学文学部紀要』85巻、2016年。
- 二瓶孝夫「続・ハワイにおける日本酒の歴史(1)ハワイ官約移民百年に寄て」『日本醸造協会雑誌』80巻、11号、1985年。  
「続・ハワイにおける日本酒の歴史(2)ハワイ官約移民百年に寄せて」『日本醸造協会雑誌』80巻、12号、1985年。  
「北米のサケ醸造所と、その100年の歴史概観」  
[http://www.kitasangyo.com/Archive/Data/Sake\\_US\\_history.pdf](http://www.kitasangyo.com/Archive/Data/Sake_US_history.pdf)  
(最終閲覧日：2020年11月22日)
- 宮本なつき「砂糖黍畑の女たち—ハワイ日本人移民女性と1920年のオアフ島第二次ストライキ—」『ジェンダー史学』3号、2007年。
- 武藤三代平「榎本武揚による日本人移民排斥問題への対策と社会事業の展開：禁酒運動・労働運動・移民奨励の人脈を中心に」『北大史学』55巻、2015年。

森岡裕一「耐婚・離婚・復婚：女性禁酒物語作家の結婚観」『研究論集（関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部）』111巻、2020年。

安武 留美「禁酒」を巡る近代化の一側面：アメリカ白人女性大衆のトランスナショナルな社会運動と社会秩序の再編成」『関学西洋史論集』38号、2015。

吉 沢 淑、木村精二、林 修三「ハワイにおける日本酒・味噌・醤油の歴史 日本酒（その1）」『日本醸造協会雑誌』73巻、5号、1978年。

吉 沢 淑、木村精二、林 修三「ハワイにおける日本酒・味噌・醤油の歴史 日本酒（その2）」73巻、7号、1978年。

吉田 亮「移民社会とキリスト教 — 美山貫一のハワイ日本人 移民伝道 —」『キリスト教社会問題研究』31巻、1983年。